西高卓球部の創立時代

二期生　田中　恒男

私が現在の西高の前身である都立玉泉中学（後、都立十中と合併、新制高校が発足して都立十高から西高と改名）に入学したのは太平洋戦争の末期昭和十九年である。その頃は本土にも頻頻に空襲があり、警報が鳴ると授業を打ちきって家に帰されることがしばしば、帰宅の途中で友だちが機銃掃射をうけたこともあった。

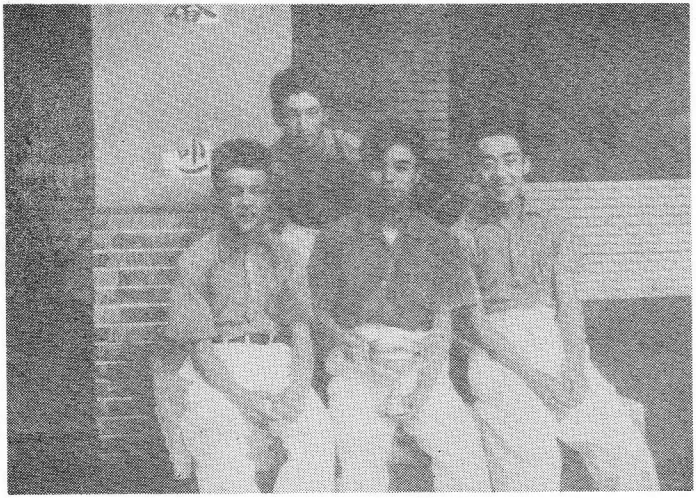
翌二十年は私たちも勤労動員で軍需工場で働くことになり、学校での授業は殆ど行われなくなった。そしてその年の八月が終戦。何も物資のない戦後の混乱期から徐々に秩序が回復していくことになる。私はその年の五月の空襲で家を焼失し、しばらく信州の山の中に疎開していたが、翌年東京へ戻って間借りしながら再び学校へ通いはじめた。それが中学三年生のとき。その二学期のおわりから三学期にかけて、だれが始めたか忘れたが、何人かの生徒が中庭のすみに置いてあった古い机を利用して、家から木のラケットを持ってきて、ピンポン遊びを休み時間にやりだした。あまり遊び道具のない当時のこと、これが急にはやりだして、昼休みや放課後のひととき、この特製ピンポン台の前には順番を待つ行列ができたものだった。この遊びは寒いときにはやるようで、春になって暖かくなると次第にすたれ、野球などの方が盛んになっていったが、ピンポンの妙味にとりつかれた何人かの仲間がその後も放課後人のいなくなった教室で机をよせてやってみたり、ときどき卓球場へ行って練習したりしていた。ボールも軟球から硬球を使うようになり、ラケットも木からコルク張り、さらにイボのついたラバー張りを使用するようになる。（その頃はまだ軟式が普及しており、スポンジやソフトなどの特殊ラバーは開発されていなかった）それとともに技術の方も少しずつ向上し、ロングの打ち合いやカットのテクニックなどを覚えるようになった。

当時、西高のクラブ活動としては、野球部・バレー部・タッチフットボール部・サッカー部などがすでに活躍していたと思うが、卓球部はなかった。そこで、卓球も正式な部として対外活動をしたいと願っていた我々は、ある日N君が中心になって、「卓球部はなぜできないのか」とでかでかと書いた紙を校長室の前に張りだした。その結果「手順もふまずにいきなり校長室に張り紙をするなどけしからん」と校長室へ呼ばれてお目玉をちょうだいすることになるが、それでも部を作って活動したいという熱意はわかっていただけたわけである。また、卓球台を買う予算や台を置く場所もないという

難かしさもあったが、結局このことがきっかけとなり、藤崎、川嶋両先生のご支援があって、翌年度から何とか職員会で承認されて、西高卓球部が正式に発足したのである。

はじめのうちは、やっと買ってもらった一つの台を、焼け残りの体育館のすみにおいて練習した。（西高は戦災はまぬがれたが、戦後、失火で体育館の半分以上を焼失）勝ち抜き戦は一度負けると三十分以上も次の順番を待たなければならないといった練習状態だったが、みんな熱心だった。放課後は暗くなるまで（電気はもちろんつかない）朝は始業より一時間くらい前に来てフォア打ちとゲームをやった。日曜日にも申し合わせて出てきたり、近所の学校（久我山高校、杉並高校、荻窪高校など）にも出かけて行って練習させてもらったり、練習試合をやったりした。はじめのうちは負けてばかりいたが、好きこそものの上手なれで、やがて対等に勝負できるようになり、一年後くらいには城西地区でもいいところまでいくようになった。私が卒業した年の憲法大会では一回戦から逆転試合をくり返して勝ち進み、ついに決勝戦で小石川高校を降して東京都団体初優勝を飾ったのである。このときのメンバーは、荻村君を中心に、市川・田辺・亀田・甲子らの諸君で、当時の写真があるので載せておく。

その後、荻村君は個人戦で関東ベスト8に、西高を卒業してから軟式全日本で優勝、さらに東京で行なわれたアジア大会の団体戦に出場して無敗の成績をあげ、その秋には全日本硬式選手権で優勝、翌年の世界選手権大会で団体、個人に優勝、とめざましい活躍を続け、一躍世界卓球界の第一人者となったことは皆さん御存知の通りである。



▲昭和25年11月　杉並区民大会　優勝